

早期高強度コンクリートの強度特性について

日本セメント(株) 研究所 工博 山崎豊司 ○工修 塚山隆一

1. まえがき

コンクリートの早期強度を高めるには、コンクリート工事の急速化の前提条件をあって、とくに、重要構造物の補修工事や、P.C. その他の 2 次製品製造の分野などで望まれている。早期強度を高める方法としては、(1) 早強性のセメントを使用する。(2) 硬化促進作用を有する促進剤を使用する。(3) 富配合でスランプの小さな配合として水セメント比を小さくする。(4) 打込み後のコンクリートから余分の水分を除去して水セメント比を小さくする。(5) 何らかの手段で高温養生または高温高压養生を実施する。などが可能であり、これらの方針あるいはこれらを組合せた方法のいくつがすでに实用化されている。著者らは上記諸方法のうち、(1), (2), および(5)について、現在实用化されている方法をさらに改善する目的で、いくつもの実験を行ったので、その結果を報告する。

2 早強性セメントを用いたコンクリートの強度に関する実験

2.1 圧縮強度

早強ポルトランドセメントおよびアルミナセメントを用いた、骨材最大寸法を 25 mm, スランプを 10 cm としたコンクリートの圧縮強度 (中 10 × 20 cm) を試験した。単位セメント量は 300 kg/m³, および 400 kg/m³ の 2 種類とし、養生温度 (水中) は 5°C および 20°C とした。試験結果を図 1 および図 2 に示す。アルミナセメントを用いたコンクリートは、養生温度に関係なく、材令 4 時間まで 200 kg/cm² 以上の強度を示しているが、早強セメントを用いたコンクリートが同じ強度に到達するには、20°C の場合で 2 日間、5°C の場合で 4 日間を要し、两者へあいだにはかなりの差が認められる。このように、現在市販されているセメントの中では、アルミナセメントの早強性が飛びぬけてすぐれている。ただし、アルミナセメントには長期強度が低下する性質⁽¹⁾ があるため、永久的な構造物に使用するには危険を考慮している。この問題を開いて長期間の強度試験を行った結果の一例を図 3 に示す。コンクリートの配合は、水セメント比 40%, 最大寸法 25 mm, スランプ 10 cm とし、材令 1 日まで 20°C 水中、材令 1 日より材令 8 週まで 50°C 水中、材令 8 週より材令 2 年まで

図 1. 早強性セメントを用いたコンクリートの圧縮強度 (最大寸法 25 mm, スランプ 10 cm)

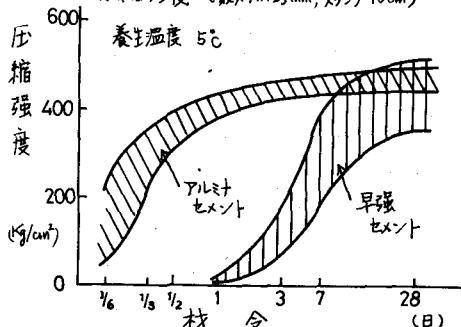
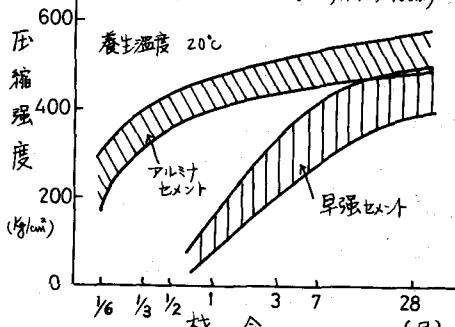


図 2. 早強性セメントを用いたコンクリートの圧縮強度 (最大寸法 25 mm, スランプ 10 cm)



20°C水中で養生した。材令1日より材令1週までのあいだに、圧縮強度は約250 kg/cm²低下することを示した。しかし、その後、材令2年まではほとんど変化が認められなかった。したがって、アルミナセメントを使用する場合、適当な方法で長期強度を推定すれば、永久的構造物に用いるコンクリートの配合設計も可能であるが、このような性質が使用上の制約となることは否めない。前述のように、早強セメントとアルミナセメントの早期強度には相当な差があるから、この差を埋めることができるセメントの開発が望まれる。最近の水和理論の進歩およびセメント製造技術の進歩よりすれば、早強ポルトランドセメントを改良して、長期強度を安定化新しいセメントを開発することは不可能ではないと思われる。

2.2 曲げ強度

碎石を用いた舗装コンクリートによって、アルミナセメントと早強セメントの曲げ強度を比較した結果を図4に示した。アルミナセメントを用いたコン

クリートでは、材令4時間で40 kg/cm²以上の曲げ強度が得られたが、早強セメントで同等の曲げ強度を得るには3日以上を要した。圧縮強度の場合と同様に、アルミナセメントと早強セメントのあいだには相当な差が認められた。すな、アルミナセメントを用いたコンクリートを50°C水中で養生して長期曲げ強度の低下を促進試験した結果は27 kg/cm²であり、20°C水中で養生した同材令の供試体にたいして、約40%の値まで低下した。

3. 混合剤に関する実験

早期高強度を得るための混合剤としては塩化カルシウムが広く使用されている。著者らは、塩化カルシウムによる促進効果をさらに高めるための混合剤を研究し、複合アミン系促進剤、Tを少量添加するとの効果あることを見出した。図5は、最大寸法25 mm、スランプ8 cmのコンクリートの圧縮強度を試験した結果を示したもので、添加剤Tは水セメント比の小さなコンクリートにたいして、大きい効果を示した。早強セメントに塩化カルシウム2%を加えたものは早強セメント単味のものより約50 kg/cm²の強度増加を示したが、これに添加剤Tを少量加えることにより強度はさらに50 kg/cm²増加した。すなわち、早強セメント単味のものと比べて、100 kg/cm²の強度増加が得られたこととな

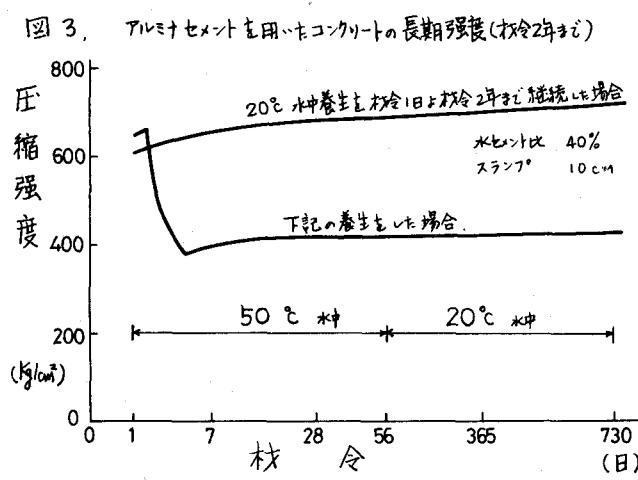


図4. 早強セメントを用いた舗装用コンクリートの曲げ強度 (20°C水中養生)

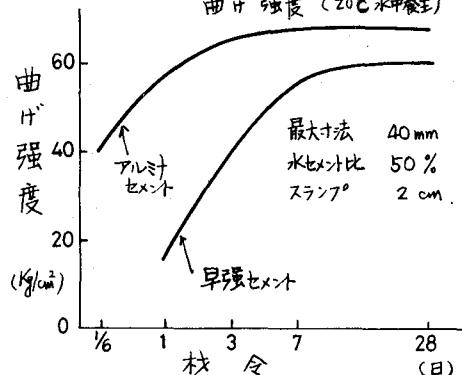


図5 早強セメントを用いたコンクリートの圧縮強度におよぼす
硬化促進剤の影響

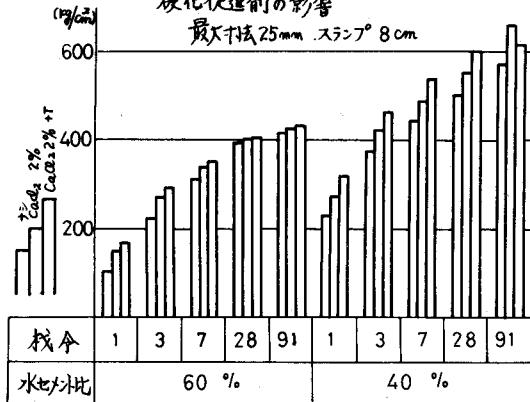
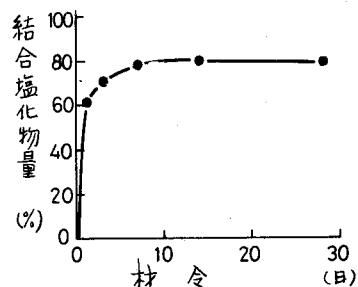


図6 水和物と結合した塩化物の割合



る。強度試験の結果をもとにして、一定の所要強度にたいする示方配合を試算し、材料費の経済比較を行ってみたところ、材令1日強度200 kg/cm²において、早強単味を100とすれば、塩カル2%添加が9.6%，二水に添加剤Tを加えたものが9.4%で、経済的にも有利であることが分った。しかし、塩化物系の促進剤には鉄筋の発錆を助長する欠点がある。これを検討するため、セメント中の結合塩化物量を、塩化カルシウムと添加剤Tを加えたペーストで定量した。その結果は図6に示すところであり、塩化物の80%はセメント水和物と結合して、不溶性の化合物、 $C_3A \cdot CaCl_2 \cdot nH_2O$ となり、残りの20%が鉄筋に有害な可溶性塩化物として残存することを認めた。

4. 高温養生に関する実験

4.1 蒸気養生

2次製品工場で蒸気養生を行う場合、1日1工程から2工程の速度で行われることが多いようである。著者らはこれを1日3工程まで増加することが可能かどうかを実験によりたしかめた。1日3工程の蒸気養生を行つたためには蒸気養生時間は8時間以内とする必要があり、このよう短時間の蒸気養生では前養生時間などの影響も大きくなることからめた。そこで下記の条件を組合せて実験を行つた。

(1) 前養生時間 0, 2, 4 時間

(2) 温度上昇速度 1.5 °C/hr.

(3) 最高温度 65 °C

(4) 冷却時間 1 時間

(5) 蒸気養生時間 8, 12, 24 時間

コンクリートは早強セメントを用い、単位セメント量を300および400 kg/m³、スランプを5 cmとした。

表1. 蒸気養生したコンクリートの強度
* 蒸気養生後経過7日前 20°C水中養生

単位セメント量 (kg/m ³)	蒸気養生時間 (時間)	前養生時間 (時間)	蒸気養生強度 (kg/cm ²)		20°C水中養生強度 (kg/cm ²)	
			直後	7日*	1日	7日
300	8	0	166	308		
		2	113	337		
		4	58	363		
	24	4	236	366	93	322
		0	271	294		
		2	311	312		
400	8	4	341	380		
		0	234	360		
		2	190	361		
	24	4	93	410		
		12	319	413	168	398
		0	352	325		
		2	346	342		
		4	368	422		

試験結果は表1に示すとおりである。蒸気養生直後の強度は当然のことながら蒸気養生時間が長くなるほど大きいが、蒸気養生時間8時間、すなまち、1日3工程の場合にも93～234kg/cm²の強度が得られた。この場合、前養生時間の影響が大きく、前養生時間の短いほど強度は大きかった。前養生時間が0の場合の強度は234kg/cm²で20℃水中で養生した材令1日強度を上回る。ただしこの場合は、20℃水中での後材令1日まで養生した強度が材令1日まで20℃水中で養生したものより若干小さくなつた。蒸気養生直後の強度は脱型および搬運時に十分に耐えうる大きさであり、1日3工程の作業は可能である。しかし、脱型時にプレストレスを導入するような2次製品には不足があり、このような場合には、蒸気養生直後は300kg/cm²以上の強度が必要である。最近、蒸気養生時の水和反応に関する研究も行われ始めているので⁽³⁾、これが蒸気養生に適したセメントの開発に発展し、2次製品工業の生産性向上に役立つことが期待される。

4.2 断熱養生

コンクリートが硬化するとき、水和熱によって温度上昇があつる。これを利用すれば、外部から熱を加えなくとも、硬化を促進される。これを実用化しようとする研究はすでにいくつがあるが⁽⁴⁾、著者らは断熱カロリーメーターを利用し、温度調整装置を取りつけた特殊な型枠を用いて、早期強度の促進程度を調べた。試験結果は図7のとおりであり、上図の断熱温度上昇と同じ温度リレキで養生した場合、下表のことく、早期強度は2倍以上促進されることがわかつた。

5 むすび

早期高強度コンクリートの可能性と向題を実験的に検討した結果、(1) アルミニナセメントと早強セメントの中間領域を埋める新しいセメント、(2) 鋼筋に無害な混和剤、(3) 水和熱を利用して養生方法などが今後研究を要する点があり、また、これらは可能性のある方法であることを認めたい。

参考文献 (1) R.TSUMAYAMA, Effect of Conversion on Properties of Concrete Using High Aluminous Cement, Symp. Chem. of Cement (1968)

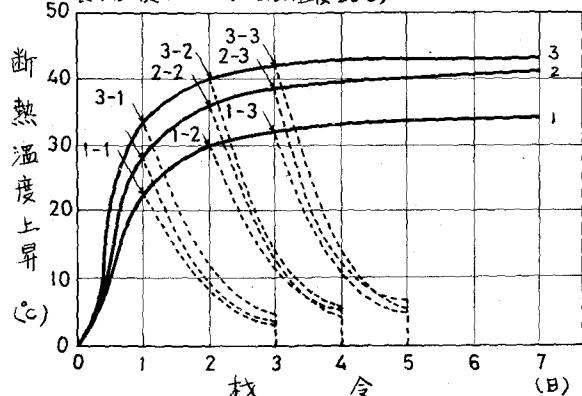
(2) 塚山隆一, アルミニナセメントコンクリートの強度における初期養生影響, ベンチマーク新報第43号.

(3) H.TERAMOTO, N.KAWADA, Heat of Hydration of Portland Cement During Steam Curing Under Atmospheric Pressure, Symp. Chem. of Cement (1968)

(4) A.MEYER, Beton mit hoher Frühfestigkeit, Betonstein-Zeitung, H.5/1967,

図7. 断熱養生による初期強度の増加.

(1) 養生温度リレキ (打込み温度20℃)



(2) 圧縮強度試験結果

配合 No.	単位 水灰 比 (kg/m³)	供 試 体 No.	断熱養生 直後の強度 (kg/cm²)	20℃水 中 養生強度 (kg/cm²)	断熱養生後2日前後 以後20℃水中養生 までの材令28日強度 (kg/cm²)		20℃中 養生28日 強度 (kg/cm²)
					2日前 強度	28日 強度	
1	280	1-1	1日 69	35	251		
		1-2	2日 150	65	247		287
		1-3	3日 189	84	256		
2	330	2-1	1日 122	62	293		
		2-2	2日 218	94	308		377
		2-3	3日 259	120	294		
3	380	3-1	1日 173	75	345		
		3-2	2日 259	125	341		437
		3-3	3日 314	177	341		